

帝政末期のロシア美術における日本美術の受容

福間 加容 (千葉大学)

本発表は、帝政末期のロシアにおいて、ヨーロッパから流入したジャポニズムがロシア象徴主義新世代の思想によってあらたに解釈され、アヴァンギャルド芸術の誕生に深く関与していた可能性を明らかにすることを目的とする。ロシアで日本美術が本格的に紹介されたのは、1898年以降のことである。しかしソビエト連邦時代には、ロシア美術における日本美術の影響についてほとんど関心が払われず、日本美術はロシア美術の創造活動には本質的役割は果たさなかったとされた。なぜならロシアでは、日本美術のモチーフや様式は、ジャポニズムを経た同時代のヨーロッパ美術の一部として受容されたからである。20世紀初頭のロシアにおけるジャポニズム流入とその重要性について注目されたのは近年、文学研究においてである。一方、美術史の分野では、この問題の重要性はようやく認識されたものの、研究は端緒についたばかりである。しかも、版画作品に、浮世絵の図像上の影響を指摘する従来の限定された見解の域を出ていない。先行研究の限界を打破するため、本研究ではロシア象徴主義新世代の画家パーヴェル・クズネツォフ（1878-1968）の《日本の版画のある静物》（1912）（ペテルブルグ、A. F. Chudnovskii 所蔵）を主たる分析の対象にする。歌麿の版画を主要なモチーフにした明るい色面と明晰な構成によるこの作品は、日本の美術作品から図像を借用した最も早い時期の、かつ唯一のロシア絵画とされるが、主題は不明であり、いまだ定説となる解釈が提出されていない。発表者は、ロシアにおける日本美術の受容の最盛期が日露戦争（1905年）の前後と重なっていた事実と、当時、ロシアのインテリゲンツィアの間を席卷していた象徴主義思想とに注目して、1896年、1901年、1905年、1906年にペテルブルグとモスクワで開催された日本美術展の再現を試み、当時のロシアにおける日本美術の受容状況について具体的な再構成を行い、幅広い文脈によって作品分析を行う。論者は、以上の考察から、「東」と「西」を統べる普遍的芸術の創造を志したロシアの画家の重要なマニフェストの具体例として、P. クズネツォフの《日本の版画のある静物》をとらえる。そして、最後に結論として、日本美術は、ロシア象徴主義新世代の思想により、「東」の美術であっても、ヨーロッパ文化に本質的な影響を与え、新しい芸術を創ることを可能とした成功例として積極的に解釈され、象徴主義美術からアヴァンギャルド芸術へと推移していく際に本質的な影響を与えた可能性を提示する。ロシアにおける日本美術の受容は、ヨーロッパのジャポニズムとはまったく異なる様相を呈していたのである。